

目指す児童像 『自分で考え、よりよい判断ができる子ども』

目線の高さ

先月24日、今年のプロ野球ドラフト会議が行われました。毎年、将来を有望視された若者が満面の笑みで映し出されます。しかし、この中で引退まで第一線で活躍するのは一握りです。それだけ厳しいのがプロの世界だということでしょう。

さて、メジャーリーグの1シーズン最多安打記録262本は日本人選手によって樹立されています。この選手はドラフト4位で日本の某球団に入団し、2軍からスタートしています。また、往年の名選手もドラフト6位であったり、テスト生同然で入団したりし、頭角を現して、中心選手になった方もいます。現役メジャーリーガーでは日本の球団に育成選手としての入団がスタートの投手もいます。

おそらく、このような選手に共通するのは「プロ野球選手になること」がゴールという気持ちで入団されてはいなかったのかなと思います。プロ野球選手としてどのような選手になりたいのか、自分がチームの中で生かせる強みは何なのか、出場のチャンスを得るためにはどうしたらいいかなどを試行錯誤しながら練習をされたのではないかと思います。

成り行きに任せてばかりで成果や結果を望んでも思うに任せないと思います。自分の目線を高くして目標を見据えたいうえで、今自分に必要なことは何なのかを考えることはプロ野球に限らず必要だと感じています。



匠の話

こんな話があります。

Aさんが家を建てようと、大工さんの下を訪れました。家のことについて様々な話をする中で、2階に上る階段をどこに設置するかという話になりました。Aさんが希望した階段の場所には家を支える梁があり、大工さんは「そこに階段はつけられない」「耐久性に問題がありますよ」と説明しました。

しかし、Aさんは頑として譲らず、「自分の家を建てるのだから、自分の好きにしているじゃないか」「大工は依頼主の言う通りの家を建てればいいんだよ」と、自分の意見を通しました。大工さんは「わかりました。でも、説明はしましたよ」と、Aさんの希望の場所に階段を設置しました。やがて、Aさんの要望した通りの家が完成し、Aさんは大満足でした。

しばらくして、Aさんの住んでいる地域に台風が上陸しました。Aさんの家は台風に耐えることができず、倒壊してしまいました。

世の中には様々な専門的な知識や技能をもった方がおられます。そのような方は専門的な見地から様々なアドバイスをくださることがあります。時には自分が思っていたことと真逆の指摘をいただくこともあり、「目から鱗」のこともしばしばです。迷ったり、悩んだりしたときは複数の専門家に助言をいただくように心がけています。

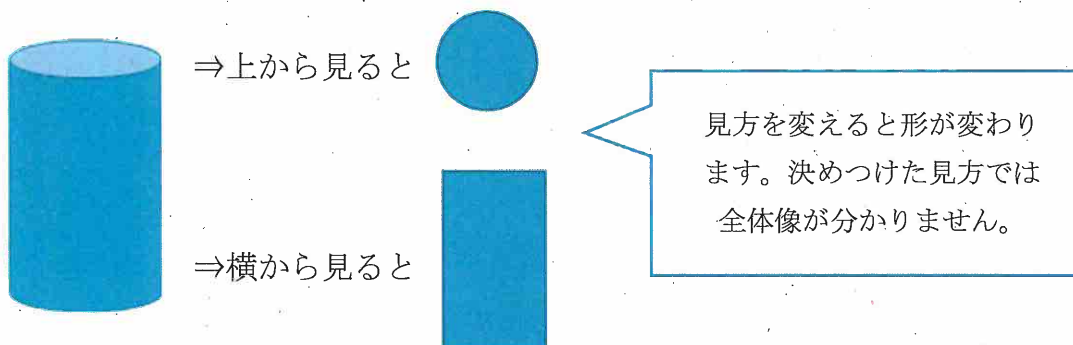
目指す児童像 『自分で考え、よりよい判断ができる子ども』

アリの目・鳥の目・魚の目

タイトルは物事の見方を表す時によく使われるフレーズです。「アリの目」とは物事を近くに寄ってつぶさに詳しく見ることです。「鳥の目」とは視点を高くし、物事の見える範囲を広くすることです。そして「魚の目」とは自分の周囲へ視点を張り巡らすことです。

さて、「アリの目」では詳しく物事を見ることができますが、全体像はわかりにくくなります。「鳥の目」は広く、全体を見渡すことができますが、物事の詳細は見えにくい状態です。「魚の目」は周りの様子はわかりますが視界は決してよくはありません。

つまり、物事を見る視点を一通りしかもたないと、正しい判断ができないことがあります。子どもたちを見る視点も様々な角度から見ることで、子どもたちのよりよい成長を促す言葉かけや指導ができるのではないかなあと考えています。



小体連

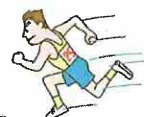


去る10月29日、6年生が小体連に出場しました。走ったり、跳んだり、投げたりする競技を通して、諫早市内の他の6年生と交流を深めました。

競争をするわけですから、勝敗がつきます。悔しい思いをした子もいたと思います。しかし、陸上競技は他と競うばかりでなく、自分と競うことができる競技でもあります。このことは小体連の壮行会でも6年生に話をしたところです。

今夏のパリオリンピック女子やり投げの金メダリストは、65m80という他の追隨を許さないビッグスローで見事頂点に輝きました。しかし、その選手は「金メダルはとっても嬉しい、でも自分の目標である70mに到達できるようこれからも頑張りたい」とインタビューに答えられていました。

単に他との優劣を競うばかりではなく、自分への挑戦をする姿勢は結果として自分を多くの意味で成長させるのだらうと感じます。小栗小の6年生の多くが自分への挑戦に躍動していた姿が素晴らしいと感じました。



目指す児童像 『自分で考え、よりよい判断ができる子ども』

かわいい子には

先日、国民的アニメキャラクターの声優さんが老衰のため90歳でお亡くなりになりました。1979年から2005年までそのキャラクターの声を努められましたので、この期間にこの方の独特の声質で育った方も多いのではと思います。

さて、この声優さんの独特の声質は作られたものではなく、地声に近いものだと思います。なので、思春期には、自分の声に自信がもてなくなったそうです。

しかし、お母様がそのような我が子の様子を見て、自分に自信がもてない子になってほしくないと、声を出す部活動を勧められたそうです。

そこで入部されたのが放送部だったそうです。初めは周囲から入部に反対の声があったそうですが次第に何も言われなくなったそうです。

さらに声優をされる前には俳優としての活動もされていたそうです。

もし、お母様が我が子のコンプレックスをかばうがあまりに「声を出す必要ない」とか我が子の声を不憫に思ってしまったら、私たちはあの唯一無二の声をしたキャラクターに会えなかったかもしれません。

子どもたちは成長過程で悩んだり迷ったり、時に傷ついたりします。その時家族から「がんばれ！」と背中を押してもらうのが子どもとしては一番心強いのではと思いますがいかがでしょうか。

「乳児の時は肌を離さず、幼児の時は肌を離して手を離さず、少年の時は手を離して目を離さず、青年の時は目を離して心を離さず」と言われます。子どもたちが自信をもって自立していくための大人の在り方を示しているかと思います。

頌徳祭

小栗地区の子どもたちへの教育環境の充実を通して地域貢献をされた先人の遺徳を偲ぶ頌徳祭を10月18日に開きました。このような催しを行う学校に諫早市内で過去2校勤務したことがあります。そう考えると諫早の先達は教育の重要性をお考えになり、後世に続く人的財産こそ、ふるさとを発展させていくことにつながるのだという熱い思いをもたれていたのだらうと思います。

10数年前、離島勤務をしていた時、地域の方が小中学生に「いつか島を出る時が来るでしょう。島を離れても、その地からふるさとのためにできることをしてくれたら嬉しい。そのために今しっかり勉強してほしい」という趣旨のことを話されていました。

子どもたちが将来の基盤をどこに据えるかはわかりません。しかし、この地で学び、この地で育ったことが子どもたちの人生にいくらかでも寄与できるように、学校でも学業をはじめ諸活動に取り組んでいきたいと思ひます。



目指す児童像 『自分で考え、よりよい判断ができる子ども』

令和6年度後半戦

「夏休みが終わったなあ」と思っていたら、一カ月が経ち、10月も2週目です。令和6年度も後半に入っています。

年度当初は遠かったそれぞれの学年のゴールが少しずつ見えてくる時期でもあると思います。日々の学習、クラスの仲間と過ごす時間、学校・学年の行事やクラスでの取組などを通して充実した有意義な後半としてほしいと思います。

時間

私はこの夏、57歳になりました。誕生から日数にして20805日（うるう年をカウントしてません）、時間にして499320時間を費やしました。誕生日から一月半ほど経つので、もう少し時間を費やして今日に至っています。

この今日までの時間をどれだけ有効に使ったかと問われると、少々自信がありません。幼児期から小中高校、大学、社会に出てから教師となって34年目、その時代時代に「こうしておけば…」と思うことも多々あります。しかし、それでもそれぞれの時代の毎日をそれなりに懸命に生きてきたからこそその今日なのかなとも思います。

子どもたちもやがて成長し、年を重ねていきます。その時、自分の生きてきた時間を振り返った時、「こうしておけば…」「もっと…」ができるだけ少なくなるよう有意義な時間の積み重ねをしてほしいと思います。



気になって

家を出た後、「鍵を閉めたかな」「窓はどうだったか」「電気消し忘れたかも」「見たい番組の予約録画してたかなあ」などなど。気になって、不安になってせつかく目的地の3分の1くらいまで来ていて自宅に引き返したことが、1度や2度ではありません。みなさんにはこんな経験ありませんか？そして、引き返してきて見てみると、鍵も窓も大丈夫、電気もしっかり消されていて、録画したものの結局いつまでも見ない…という結末を迎えるのも多々あります。つまり「取り越し苦労」です。

- さて、この気になって不安になることは、日常生活で数多くあると思います。例えば
- ・自分が言ったこと、うまく伝わったかな
 - ・何か自分のことを言われているみたい
 - ・言いたいことはあるけど、正しいのかな
 - ・話の輪に入りたいけど、今いいのかな
 - ・声掛けしたのに、返事がなかったけど無視されているのかな
 - ・何か見られているみたい などなどです。

これらに共通しているのは「～かな」「～みたい」という不確定な推測です。推測すること自体、決して悪いことではないと思います。それは繊細さ、慎重さの表れともいえます。しかし、推測に振り回され、推測が推測を呼んで、推測の無限ループから抜け出せなくなると、身動きが取れなくなってしまいます。

冒頭の話に戻すと、気になった時「まあいいか」と思うようにしています。

目指す児童像 『自分で考え、よりよい判断ができる子ども』

折り返し間近

4月に始まった令和6年度も今月末を迎えると、残り半分です。その今月末までも約1週間です。

おそらく年度当初に自分の目標、クラスの目標を立てていると思います。進捗状況はどうでしょうか。

自分の成長を振り返るいい機会としてこの折り返し地点である9月末を生かしてほしいと思います。

宿泊学習・修学旅行



5年生は明日(9/25)から6年生は10月10日から共に1泊2日の行事を行います。どちらも泊を伴うことで、ワクワクだけでなくドキドキもあるのではないかと思います。

また、自分だけの楽しみを追求するのではなく、集団としての協調性を培ういい機会にもなります。

「楽しかった」「面白かった」にとどまらず、その先にある「学び」をそれぞれの子どもたちが得て帰ってきてほしいと思います。

私も夏休みに広島・宮島まで足を延ばしてきました。国内外を問わず、多くの観光客がいらっしやっていました。少なくとも私が目にし、感じた中には観光地でのルール違反や眉をひそめる行動はありませんでした。不特定多数の人が集まる場所だからこそ、ルールを守って自分も他人も気持ちよく過ごせることの大切さ、ありがたさを実感して帰ってきました。

自分を見つめる

日本人メジャーリーガーがついに前人未到の大記録を樹立されました。素晴らしく、誇らしいことだと思います。また、チームの垣根を越えた賛辞が送られています。しかし、中には「あいつがいなかったら、自分が一番だったのに」「あいつのせいで、出番が減った」と思う選手がいたらどうでしょうか。

自分がどのように努力してきたかには目を向けず、自分が評価されないことや自分の置かれている状況を他人や他の要素のせいにして不平不満を声高に言い散らす人は、ますます評価を下げるのではないのでしょうか。

私が好きなボクシングを題材にした漫画があります。気が弱く、臆病な主人公がチャンピオンになっていくストーリーです。その主人公の言葉に「僕は何も変わっていない。好きなことができ、それに打ち込んでいたら、周りが変わっていた」という趣旨のものがあります。

子どもたちには周りを貶めて自分の心の安寧を図るようなことではなく、自分を見つめ、高めることで周りを変えていける人に育ててほしいし、育てたいと思いますが、いかがでしょうか。